

第2回研究会

「台湾の多文化共生社会のソーシャルワーク～婚姻移民支援に着目して」報告

1 講師

陳麗婷 氏 目白大学 人間学部 人間福祉学科 准教授

著書 『台湾から学ぶカルチュラル・コンピテンス』相川書房

監訳書『ソーシャルワーク実践のためのカルチュラル・コンピテンス——宗教・信仰の違いを乗り越える シーラ・ファーンネス（著）、フィリップ・ギリガン（著）』明石書店

2 日時

2024年12月1日 15時から17時 その後『ASCAミングルin奈良』（望年会）

3 会場

ぽれぽれケアセンター青山(社会福祉法人うねび会) ※ ハイブリッド方式にて開催

〒630-8101 奈良市青山 4-3-3

4 主催

ASCA（特定非営利活動法人アジアソーシャルワーク創造協会）

代表 桂良太郎 日越大学(ハノイ国家大学)客員研究員

5 後援

特定非営利法人 日本ソーシャルワーカー協会（JASW）

6 要旨

講演では、1980年代以降の台湾における急速な工業化がもたらした農村男性の婚姻難と、それに伴う東南アジア女性との国際結婚の増加について言及された。こうした婚姻移民の多くは経済的困難を背景に台湾に渡り、言語的・文化的障壁により孤立を強いられてきたが、2016年以降、蔡英文政権による「新南向政策」の下、東南アジア出身者は社会の中で積極的に育成・活用すべき人材として位置づけられるようになった。

台北市の新住民家族サービスセンターの実践事例では、ミクロ（相談・ケースマネジメント）、メゾ（機関連携によるネットワーク形成）、マクロ（多文化共生の啓発・政策提言）という多層的視点からの支援が紹介された。また、支援現場のソーシャルワーカーへのインタビューを通じて、「エンパワメントとアドボカシー」、「自己覚知」、「持続可能なシステム」の重要性が浮き彫りとなった。特に、支援者が自らの文化的価値観を問い直す姿勢や、多文化共生のための制度的整備の必要性が強調された。

質疑応答では、技能実習生問題を例に、日本社会の受け入れ体制の未熟さや、外国人労働者を「人」として扱う視点の欠如が指摘された。また、支援に関わる労働者の保護や、言語支援体制の脆弱性にも課題があるとの意見が挙がった。最後に、桂代表より「日本は欧米の福祉モデルに偏重しがちだが、台湾の取り組みから学ぶべき点が多い」との指摘がなされ、本研究会はソーシャルワークの未来を展望する上で極めて有意義な機会となった。

7 望年会

「螺鈿 最後の一杯」(近鉄奈良駅前)にてベトナム人家族含めて盛大に行われた。当店の主人は奈良の観光大使でもある。



子どもたちも多く参加した望年会の光景

ゆめ・ゆとり・ゆうき から ゆっくり、ゆったり、ゆたか に！！